

「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」（平成 25 年 2 月）において
未検討の課題の協議で出された意見の整理（平成 28 年 9 月まで分）

○「文化芸術の振興に関する基本的な方針—文化芸術資源で未来をつくる—
（第 4 次基本方針）」（平成 27 年 5 月 22 日閣議決定）

目指すところ 文化芸術資源で未来をつくり文化芸術立国を創出する。

〈国語の役割・重要性〉

- ・論理的思考力，想像力，表現力などの基盤
 - ・意思疎通の手段
 - ・その言葉を母語とする人々の文化の基盤
- 個々人はもとより，社会全体としてその重要性を認識し，国語に対する理解を深め，生涯を通じて国語力を身に付けていく必要

⇒ 上記の第 4 次基本方針を踏まえての論点と方向性

○文化庁が描く理想的な言葉の使い手をどのように考えるか。

（他省庁，個人，研究者が示すところとの違い）

○コミュニケーションの問題として種々の問題も取り込んで考える。

（言葉遣い，公用文，表記の揺れ，漢字の表語性，漢語と和語など）

◆コミュニケーションの問題として取り上げる必要のある基本的なポイント

- ・コミュニケーションをどう捉えるか。
- ・コミュニケーションの検討対象をどう捉えるか。
（書き言葉／話し言葉／打ち言葉）
- ・コミュニケーション能力をどう捉えるか。
- ・言葉の問題として扱える範囲をどう捉えるか。

《参考》

「文化芸術の振興に関する基本的な方針—文化芸術資源で未来をつくる—
(第4次基本方針)」(平成27年5月22日閣議決定)の概要(国語関連部分)

【目指すところ】

文化芸術資源で未来をつくり文化芸術立国を創出する。

*文化芸術立国：文化芸術を振興することにより、心豊かな国民生活を実現するとともに、
活力のある社会を構築して国の魅力を高め、経済力のみならず文化力により
世界から評価される国

*文化力：文化芸術の持つ、人々を引き付ける魅力や社会に与える影響力
(用語の説明は、第3次基本方針(平成19年2月9日閣議決定)による)

【国語に関する認識】

言葉は、論理的思考力、想像力、表現力などの基盤であり、意思疎通の手段である
と同時に、その言葉を母語とする人々の文化とも深く結び付いている。このような文
化の基盤としての国語の果たす役割や重要性を踏まえ、個々人はもとより、社会全体
としてその重要性を認識し、国語に対する理解を深め、生涯を通じて国語力を身に付
けていく必要がある

(第3 文化芸術振興に関する基本的施策 5 国語の正しい理解)

【講ずべき施策】

- (1 「国語に関する世論調査」とその活用)
- (2 常用漢字表及び関連指針の普及)
- 3 敬語に関して、具体的な指針の普及を図るとともに、「言葉遣い」や「コミュニ
ケーションの在り方」について検討し、その成果の普及を図る。
- (4 消滅の危機にある言語・方言の状況改善)
- (5 学校教育(全ての教科の基本となる国語力の育成言語文化の継承))
- (6 教員養成(国語についての理解))
- (7 子供の読書活動)
- (8 国民の読書活動)
- (9 外来語・外国語の氾濫、マスコミの言語生活への影響、公用文書等の表現)
- (10 国立国語研究所との連携)

(第3 文化芸術振興に関する基本的施策 5 国語の正しい理解)

出された具体的な意見

- | | |
|------------------------|------------------------|
| ○：第 20 回（11 月 27 日）の意見 | ●：第 21 回（12 月 18 日）の意見 |
| ◎：第 22 回（2 月 9 日）の意見 | ◆：第 1 回（5 月 13 日）の意見 |
| ◇：第 2 回（6 月 20 日）の意見 | ★：第 3 回（7 月 21 日）の意見 |
| ☆：第 4 回（9 月 9 日）の意見 | |

I 審議の体制をめぐって

- 現在、漢字小委員会と日本語教育小委員会とに分かれているが、コミュニケーションの在り方について審議していこうとなった場合に、対外国人と国内といった形で分科会を分けるという可能性はあるか。
- ◎ 現在、日本語教育小委員会と漢字小委員会に分けてやっているが、もし「話し言葉」を中心に審議すると、どうしても日本語教育との関わりが深くなるので、何らかの形で連絡を取り合う必要が出てくるだろう。
- ◎ これまでいろいろ言葉遣いについて審議を重ねてきたということもあって、こういう言葉遣い、こういう言葉の使い手を、是非国民の皆さんに目指してほしいといった、文化庁が描く理想的な人間像というのを考えるという作業になるのかと思う。目指すべき人間像ということになると、単なるコミュニケーションの問題ではなくて、そこには非常に大きな問題があるので、大きな委員会で話し合っていく必要がある。

II 審議の進め方をめぐって

- 「公用文作成の要領」の見直しをしていると、それでまた 1 年掛かるのではないかと思われ、言葉遣いとコミュニケーションについてはいつ取り掛かるのだろうかということになる。それだけに審議する優先順位について明確にしていく必要がある。
- 「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第 4 次基本方針）」で、コミュニケーションと言葉遣いについては、「国語の正しい理解」の 3 番目のところに、「敬語に関して、具体的な指針の普及を図るとともに、「言葉遣い」や「コミュニケーションの在り方」について検討し、その成果の普及を図る。」と一緒に挙げられている。上に書かれているものから順序よく取り組んでいくという大方針があるだろうと考える。
- コミュニケーションという課題で、いろいろな要素を取り込みながら整理していくことも、この時点では喫緊の課題である。ここから離れてしまわないようにして、一番大事なことはどこかということをきちんと議論して、そこから扱える範囲で議論していくというのが、筋ではないか。

- 本丸であるコミュニケーションに入っていないと、また最初から「国語分科会で今後取り組むべき課題について」を話し合わなければいけなくなってしまうことが、非常に怖い。
- ◎ 全体の動きとしては、「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第4次基本方針)」(以下、「第4次方針」という。)に基づいて動いており、「国語分科会で今後取り組むべき課題について」がまとめられた時とは状況が異なる。その状況の変化も十分考慮しないと、うまく進行しないのではないか。
- ◎ 2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせ、文化振興の国創り、文化国家創りを取り組んでいくという観点が第4次方針で示されているので、国語分科会で取り上げるものが、「常用漢字表」の手直しや手当てといったレベルでいいのかということを感じる。基本的に第4次方針の方向付けを十分踏まえないと、全体の流れからしたら、変な動きになりかねない。
- ◎ 第4次方針では、「国語の正しい理解」として「敬語に関して、具体的な指針の普及を図るとともに、「言葉遣い」や「コミュニケーションの在り方」について検討し、その成果の普及を図る。」と明確に書かれているので、放っておくことはできない。そういうところも考えた上で順序性を決めないといけない。
- ◎ 提言^{たな}という^{たな}と、基本的に店^{たな}ざらしで、言ったら言いつ放しで、全然誰も見ないで、そのままなくなってしまうというのがよくある。そういうものとして出すことになったら、余り真剣に取り組めないのではないか。
- ◎ 1996年に文部科学省が「生きる力」、2003年に内閣府が「人間力」、2004年に厚生労働省が「就職基礎能力」、2006年に経済産業省が「社会人基礎力」、2008年に文部科学省が「学士力」という言葉を使って提言しているが、文化庁からはそういった形で今まで出されていない。これら全ての要素を貫くものがコミュニケーション力とか、主体性とか、思考力であるが、その中に「言語」といった要素は入ってきていない。言語というものをベースにして、「学士力」の次につながるようなものを、何か文化庁の言葉で提言するというのが、説得力があるものではないかと考える。
- ◎ 第4次方針では、コミュニケーションと言葉遣いを一緒に課題として捉えているが、「国語分科会で今後取り組むべき課題について」では二つ別々である。それでいいのか。また、「その他」の課題に「国語に関する世論調査」の結果の扱い方などもあるので、全部含めた上で考えていかないと、議題を決めていくのはなかなか難しい。
- ◎ これまでいろいろ言葉遣いについて審議を重ねてきたということもあって、こういう言葉遣い、こういう言葉の使い手を、是非国民の皆さんに目指してほしいといった、文化庁が描く理想的な人間像というのを考えるという作業になるのかと思う。そういう意味では、話し言葉も、書き言葉も、言葉を使って思考する、考えるということまで含み、さらに、日本人だけではなく、外国の人たちにも分かるような形で発信して

いくということが非常に現時点では大事なことである。

- ◎ 新しい時代において意思を伝え合うということを進めていくと、日本語でなくていいのではないかという話になる。そういう中で文化芸術の振興に関する国語ということになると、やはり日本語の様々なバリエーションや特性のすばらしさを踏まえ、それを使いこなすということについてここでは審議できるが、それをどのように国全体として大切だと位置付けるか。
- ◆ コミュニケーションの理念と個別具体的な言葉遣いに取り組む場合、理念を固めてから個別具体的なことに取り組むのか、同時並行で取り組むのか。言葉遣いに対してすぐに取り組めるものがあれば、同時並行で取り組んだ方が成果物として期待できる。
- ◆ 敬語の問題では、「敬語の指針」は作られたが、「現代社会における敬意表現」の課題は未解決である。コミュニケーションを中心に置いて、敬意表現も含めた言葉遣いの問題も絡めて方向付けをしていく必要がある。
- ◆ 第4次基本方針で、日本のことを打ち出していくと言っており、日本語の良さを世界に発信していくことができないかという発言も以前あったことから、審議が内向きにならないように注意して、日本語の良さを発信するというのを頭に置いて考えていきたい。

Ⅲ 「「公用文作成の要領」の見直しについて」をめぐって

- 事務能率の改善という点で「公用文作成の要領」は成果を得ていると考えるが、第4次方針では、外来語などが増えてきているといったことも含めて「公用文作成の要領」を分かりやすく見直していく必要があると書かれている。「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」において、1番目に挙げているのにもかかわらず、1番に取り掛からなかったことに、一つ問題がある。
- 「公用文作成の要領」は、他の省庁との調整が必要だということだが、その調整の状況がよく分からない。どこまで進んでいて、どのようなことが問題なのか。
- いろいろ各省庁等の実態などがあってなかなか難しいということであるが、現代にふさわしい公用文の書き方といった理念から考えるということ捨てたくはない。ただし、現実的なやり方として、例えば部分的に可能なところから見直すといった実務的なやり方はできるのではないか。
- 公用文とかビジネス文書がほとんど横書きになったのは、この「公用文作成の要領」によるにもかかわらず、「公用文作成の要領」の中で横書きの書き方についての記述は本当に少ない。
- メールやブログなどは横書きなので、横書きの文章の書き方のようなことに取り組むこともできるかと思う。例えば横書きだと、漢数字ではなく算用数字を使うことが多くなるが、漢数字と算用数字の使い分けなどは、割に、国民が知りたいとこ

ろ、そして迷うところである。

- ◎ コミュニケーションの話題と、公用文作成の要領の見直しの問題は関わりがある。公用文作成の要領は、用語の問題が多く指摘されているが、その意図というのは平明に分かりやすく書くことを狙っている。現在の学生を見るとコミュニケーションとして誰かに伝え、分かってもらえる文章が書けない。コミュニケーションとして書き言葉を含めるとともに、公用文作成の要領も対象に含めて議論する必要がある。
- ◆ 「公用文作成の要領の見直しについて」は、コミュニケーションと一緒に議論するには無理があるとので、先送りすべきである。

IV 「常用漢字表の手当てについて」(「同音の漢字の書きかえ」の見直しについて)をめぐって

【かんじん】

- 「かんじん」の「じん」に関しては、新聞協会では、ほかのものと違い、従来どおりの「心」を使うと現在ではなっている。これは、いろいろ検討した結果、単なる書換えではなくて、「心」を使う表記もかなり古くからあるということと、新しく入った「腎」は臓器の名前で用いたいという趣旨だったのではないかということ、目になじんで、しかも比較的簡単な「心」の方を使うということからの判断である。

【もうどう】

- 「妄」の字は、「妄想」とか「軽挙妄動」などで使う漢字である。「軽挙妄動」という熟語の意味を考えたときに、心情としては、やはり、「盲」の字は使いたくない。もしかしたら、これは差別的な発想にまでつながりかねないのではないかと思う。
- 「盲」は、差別的な発想に通ずるので、この字だけを見ると使いたくないが、言葉として使うときは、一々、字の意味を思い浮かべたり、遡って考えるということはないはずだと思うので、今までの習慣を大きく変えるほどのこともないのではないか。
- どの程度漢字に対する知識のある方かによって「盲」という字に対する受け止め方は違う。
- 「盲」という字が常に差別的な意味を持っているとすれば、「盲」という漢字そのものを消してしまう方がいいという意見も出かねない。うっかりすると、言葉狩りではなく、漢字狩りに発展する可能性もあるのではないか。
- 元々「盲」で書かれていたものを、「妄」に変えるということではないので、これは漢字狩りではない。「妄」でいいのではないか。
- 遅れて国語政策の中に採用された「妄」の字が公的に使えるようになったので、用例が次第に増えてきているという傾向、動きというものも、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の検索結果から読み取ることができよう。

- 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の「少納言」で、「軽挙妄動」でどう書いているかということを見ると、全て「妄」を使い、19例示していた。「軽挙妄動」だと、「盲」の字は使わない。一般的に、「妄」の字を使っているのではないか。

【まとめ】

- 1981年に、「磨」が常用漢字に入ったので、次第に磨くという意味を持つ熟語については、「磨」という表記が増えつつあると考えられる。

【しょくじん】

- 「^{しよく}蝕甚」は大変専門的な用語のようで、恐らく今だと「ピーク」などと言っているのであろうが、そのような情報も欲しい。

【全般】

- 特に常用漢字と衝突はしなくても、既に定着してしまっていて掲げるに足りないものもあれば、新たに「きよしゅつ」のように掲げた方がいいものもある。そういうものも含めて、同音の表記があるものについて、その選択の目安を示すというような形で、「同音の漢字による書きかえ」を何か新しく検討するのは、「常用漢字表の手当て」という趣旨にもかなうのではないか。
- 「同音の漢字による書きかえ」を単なる常用漢字と衝突する部分だけを手当てするのではなく、もう少し現代に合った形で使いやすいものにしていくとすれば、「公用文作成の要領」の見直しの狙いにも通じるので、部分的にでも国語施策の中で見直していくことはできるのではないか。
- 「同音の漢字による書きかえ」は、制限的な当用漢字表の時代のもので、漢字使用の緩やかな目安である現在の常用漢字表において、書換えについて改めて見直す必要があるのか。
- 公用文の世界で齟齬^{そご}が出た部分を変えることはかまわないが、「同音の漢字による書きかえ」を残すことは、漢字制限の考え方を引きずっているとの誤解を受ける。
- 「同音の漢字による書きかえ」を「常用漢字表」の趣旨の中で、必要であるかどうかも含めて捉え直す必要がある。
- 「同音の漢字による書きかえ」に挙がっていないものも含めた表記の揺れの整理という形で取り組むのも方法であろう。
- なるべく一つの単語は一つの表記形式で書くのが効率的で望ましい。それだけに、わざわざこういう表記もよいと注記したり、推奨したりする必要はないのではないか。
- 制限的な当用漢字時代とは違うということを踏まえながら、慎重に検討していく必要がある。

V 「常用漢字表の手当てについて」(常用漢字表の定期的な検証について)をめぐって

- 学習指導要領では、送り仮名の付け方を極めて重視して、教科書に示されたとおりに送らないと誤りとする。その結果、例えば、花が「咲く(さく)」だったら、「咲」という漢字は「さく」という語ではなく、「さ」だと思ってしまう子供がたくさんいる。大人でも同様である。送り仮名の付け方を厳密に扱おうとすればするほど、漢字が、表語だということところが薄れてしまう。だから、本来、常用漢字の手当てという意味では、常用漢字でどのように書かれているのか、特に訓まで含めて、きちんとこの常用漢字の精神が伝わっているのかということを検証すべきである。

VI 「言葉遣いについて」、「コミュニケーションの在り方について」をめぐって

- ここは漢字小委員会なので基本的に書き言葉についての議論をしているが、これまで文化審議会では、話し言葉、音声言語についての議論もしてきている。ただし敬語が中心で、コミュニケーションも含めそれ以外のことに関しては余り具体的には議論されていない。
- 今の日本の書き言葉は漢字仮名交じり文で書くということになっていて、書き言葉としては、高度の知識を伝達することができる。しかし、高度の知識というのが、書き言葉にほとんど依存してしまっていて、話し言葉だけでは十分に取り上げにくいという、つまり漢字という文字がないときちんと伝わらないという問題があるのではないかな。
- 話し言葉、つまり音声言語の方でより知的な深い思考をきちんと伝えられるようなものにしていく努力が、日本語においては必要だという気がする。
- コミュニケーションに関して言えば、客観的にとか、論理的にとか、より話し言葉、音声言語で情報伝達がきちんとできるようにするにはどうしたらいいかということを考える必要があるのではないかな。ただ、具体的な方策となると、いろいろ難しい問題はあろうと思う。
- 漢語は同音が多いということもあり、和語の重要性が出てくる。同音の漢字の使い分けのようなことは、話し言葉では全然問題にならないが、漢字を習得している人はその漢語の同音の区別がかなりできる。そうでない場合には、和語を生かした話し言葉で、きちんとしたニュアンスの違いが伝えられるような表現を、大切にすべきである。
- 和語で表現できるということは、恐らく非漢字圏出身の外国人や、漢字が難しいと感じている人にも関係し、公用文書の中での外来語、英語をそのまま入れるような風潮にも関わる。漢字も使いつつも、そうではない、聞いて分かるような言い回しも工夫する必要がある。
- 書き言葉においては漢字を使うので、和語が出てきても、それを漢字の訓読みで処

理している。結局、音声として和語が体験できないというシステムになっている。そうすると、漢語や漢字に和語が隠されてしまい、どこにあるのか分からなくなってしまう。それは日本語の一種の危機である。ただ、もちろん漢語は全く不必要だということではなく、それと和語による表現力をいかに調和させていくかということが、国語問題としては非常に大事なことである。

- 話し言葉、コミュニケーション、どれも非常に漠然としたカテゴリーでの話だと思う。その中からどこかに絞っていかなければいけない。世代ごとという切り口も考えられる。かつてはこれは使った言葉だけでも、今は使わなくなったものとか、「なので」のように、今や大半の人が使用しているけれども、抵抗感のある人もいる言葉遣いを取り上げていくなどが考えられる。
- コミュニケーションは共通言語を持つところから始まるので、「やばうまい」が使える人同士はコミュニケーションを取れる。逆に使えない人とはコミュニケーションが取れないという現実も、一部出ている。今後何かそういうものに関する調査をするのであれば、それを何らか活用していかないともったいない。
- コミュニケーションというと、非常に漠としていて、哲学、政治学などいろいろなバックグラウンドによって捉え方が違う。例えば2006年の経済産業省の「社会人基礎力」は、コミュニケーションを細かい三つの能力と12の要素に分けている。小学校、中学校、高校でも、今、ルーブリック評価を使用し、細かく能力を分けながら一つ一つスキルを育成していくというような考え方もある。文字の面と、対面で会話をするといったいろいろな面があると思う。コミュニケーションについて、それを要素に分けて少しずつ議論を進めていくというのはどうか。
- コミュニケーションの中で、例えばフォーマットということであれば、公文的な内容を、また言葉そのものは言葉遣いということでは扱っていい。
- ◎ 「話し言葉」で何かまとめていこうとすると、今回、漢字小委員会でやった指針というような形のかっちりしたものを出すのはかなり難しいであろう。そうすると、恐らく提言という形が考えられ、例えば漢字をどうするとか、送り仮名をどうするとか、そういう具体的なことももちろん含むが、それだけでなく、学校教育や社会教育などの、教育の体制だとか、いろいろな場面での環境づくりに関する意見も当然出さざるを得ないであろう。
- ◎ コミュニケーションといった場合、話し言葉の伸長ということで話が進んでいるような気がするが、書き言葉のコミュニケーションというのは考えなくていいのか。学習指導要領で国語科の目標として掲げられている「伝え合う力」というコミュニケーションの力の中には書く能力もかなり想定されている。
- ◎ いろいろなコミュニケーションのイメージがあり、どんなコミュニケーションを考えるか。異文化交流の中で説得していけるような、キー・コンピテンシーに関わるようなコミュニケーションを想定するのか。それとも日常的に話をするときに、こうい

うことに気を付けたらいいというようなレベルでの話し方を考えていくのか。どの辺を想定するかという問題がある。

- ◎ 個人，研究機関，企業などが考えるコミュニケーションと，文化庁が議論するコミュニケーション論というのは何が違うのか。そこが一つ肝になる気がする。
- ◎ 書き言葉の文章をどう書くかということ，声でどう表現するかという話し言葉ということのほかにも，現代はメールであるとか，ツイッターであるとか，打ち言葉とでも言うようなものがコミュニケーションの重要な一角をなしている。打ち言葉の文体というのも，また独特なものが自然に形成されている一方で，伝えたいことがうまく伝わらないとか，誤解が生まれるとかいったコミュニケーション不全を避けるために顔文字や，絵文字，スタンプを入れてみるという，かなり複雑な方面に進んでいる。公なレベルでのコミュニケーションと私的なレベルでのコミュニケーションと，多岐にわたっている現状がある。
- ◆ 各省庁が，「コミュニケーション」や「言語」という言葉を使わずに，こうするとコミュニケーション力が付くという形での定義を提案してきているが，文化庁が取り組む以上，正面から言語という言葉を使ってコミュニケーションについて語っていくことができ，発信力のあるものとする。
- ◆ 経済界や地域コミュニティ，国際社会などそれぞれの領域で求められているコミュニケーションについて示されているものがあれば，整理したものを頂きたい。
- ◆ 世の中で多くの人が，ちょっとした一言で，コミュニケーションがしやすくなる／難しくなると感じているものを見つけていくということもできることではないか。
- ◆ 対世代，対特定ジャンル，近所付き合い，国際舞台などいずれの場におけるコミュニケーションを目指すのか絞っていく必要がある。

《入部委員御発表の要点》

- ◇ 中卒，高卒，大卒の新卒者の離職率の高さは，入社後極めて初期の段階のコミュニケーションに課題があり，ここにターゲットを絞るべき。
- ◇ 語彙，敬語，言葉の使い方の未熟さが，コミュニケーションの基礎となる信用の妨げとなり，その信用の上に築くべき人間関係の構築もままならないまま，自己表現の場を得られず早期離職に結び付いている。
- ◇ コミュニケーションの要素のうち，70%を占める非言語的要素ではなく，30%を占める言語的要素に絞り，発展を続ける情報機器などのツールの扱いは対象から除いて検討する必要がある。
- ◇ コミュニケーションを目的で段階分けをし，それぞれをスキルで分割して，パフォーマンスの到達度で示すルーブリックがなじみやすいのではないか。
- ◇ コミュニケーションの目的の初期段階を固めることが大切であり，これまでの答申ともなじむものとなる。

- ◇ 学ぶ意欲のある社会人の言語生活をサポートする取組の必要性を強く感じている。
 - ◇ コミュニケーションのための自学自習の助けとなるように、ウェブ上でループリックを公開することを考えたい。
-
- ◇ 学習指導要領の「伝え合う力」は、コミュニケーション能力を言い換えたものと考えてよいのか。あえて「コミュニケーション」という言葉を避けたのは何か意味があるのか。国としてコミュニケーション能力に触れた大事なものの一つではないかと考えられる。
 - ◇ 「敬語の指針」や「改定常用漢字表」の例などをカテゴライズして、実社会の中で出現頻度の高い、難しいものを最高レベルに置くなどしてループリックを作っていけるのではないか。
 - ◇ 働くため、意思疎通のための読む、書く、聞く、話すであれば、情報機器との関係を除いて検討するというところもあるだろうが、時代性を考えた場合、コミュニケーションを考える上で、情報機器の影響を外すということは考えにくいのではないか。
 - ◇ 国語施策の対象が社会全体であるということは理解できるが、課題について話し合うときには、ターゲットとすべき対象を共有しておかないとかみ合った議論にならないと思う。対象の絞り方について、検討が必要であろう。
 - ◇ 対象をどうするかという点については、世代間のコミュニケーションギャップということも話題になってきた。若い世代の教育ということだけではなく、年配者が若い世代を理解するという姿勢もコミュニケーション能力の一つであり、検討の対象となると考えられる。
 - ◇ 言葉そのものの力は、コミュニケーションそのものよりも、コミュニケーションをするための基礎力であると感じられる。その中でも、最も基礎的なものは、語彙力ということになるだろう。日本人がコミュニケーションを円滑に行うために最低限必要な基礎語彙表のようなものを作るということもあるかと思う。
 - ◇ 論理的な表現力があってきちんと使えたり、人間関係が構築できたりすればいいが、それは非常に高い理想であり、足元から固めていく必要がある。そのために、既にある答申などをうまく活用していくことができるのではないか。
 - ◇ コミュニケーション上の問題を考えてみると、分かる／分からない問題、あるいは分かりやすい／分かりにくい問題という要因と、感じがいい／感じが悪い問題、あるいは印象がいい／印象が悪い問題という要因とがあり、この二つの要因で説明できるのではないか。分かる／分からない問題の要因は、漢字などを含めた国語力やマスコミ、政治家、官僚などの言葉の分かりにくさ、医療などの特定分野の用語の分かりにくさにあり、これまでも取り上げられてきている。一方、分かりやすくても、感じがいい／感じが悪い問題の言葉というものがある。

- ◇ 例えば、いじめやヘイトスピーチで用いられる言葉は、非常に分かりやすいが感じが悪い。社会人など組織の中で行動する場合のコミュニケーション上の問題は、分かりやすい／分かりにくいかの問題よりも、人間関係に関わる、感じがいい／感じが悪い問題の方が要因として強いと考える。
- ◇ 分かりやすい／分かりにくい問題も大切で取り組むべきではあるが、感じがいい／感じが悪い問題にはどのようなものがあるのか、それを克服するためにはどういうモデルを提示したらよいかと議論を進めていく方が意義があると感じる。
- ◇ 今回の問題は、「これからの時代に求められる国語力について」の総論に当たる部分に関わる問題であり、平成 25 年の報告を出したときとでは状況も変化しており、今なぜコミュニケーションの在り方を問題にしなければならないのかという視点を提供しなければいけない。
- ◇ 「これからの時代に求められる国語力について」では、国語力の具体的な目安を示している。そこで示されている言語の要素とコミュニケーションの在り方とを合体させていく必要があるのではないか。
- ◇ 2年間で成果物をまとめるとなると、ある程度の踏ん切りも必要であり、国語力答申のような理念を示すものを作成するのかどうかについても見定めないとけないであろう。
- ◇ 具体的な成果物を考えるにしても、冊子がいいのか、文化庁のウェブページにシートを載せて使ってもらった方がいいのか検討する必要がある。
- ◇ 成果物の冊子を作って文化庁のウェブページに載せることも必要であるが、若い世代や世代間コミュニケーションのギャップを感じている方が触れられるような普及方法を考える必要がある。
- ◇ 知識の問題が重要で重点を置くべきという主張も理解できるが、積み残されている問題としては、感じがいい／感じが悪い問題といった運用スキルの方に焦点化することもありではないか。そうすれば、情報化や国際化、世代間の問題、ジェンダーの問題なども取り込むことが可能である。
- ◇ 分からないことを調べたり聞いたりすることも含めた知識の充実、知識の浸透という問題と、運用の問題は分けて考え、どちらから議論していくかということ自体を検討する必要がある。
- ◇ コミュニケーションというのは、コミュニケーション能力が不足していると感じている人や、コミュニケーションに問題があると感じている人には問題となるが、そういう意識のない人にとっては問題にならないという面がある。また、読む、書く、話す、聞くのどれを取り上げても言葉の問題から外れないが、コミュニケーションというずっと大きな概念となってしまうところがある。これらの点で、コミュニケーションを取り上げていく上で、何を問題にすべきなのか、整理の付かないところがあると感じる。

- ◇ 非対面のコミュニケーションが広がる世の中になっていると感じており、取り組む価値のある問題である。
- ◇ 非対面のコミュニケーションが進んでいると感じており、ICTの画面に対しては何でも言えるが、人に対して本音を言えないということがあるように感じる。
- ◇ 人前で意見を言う場合、これは大丈夫なのかという不安感の中に若い人はいて、ものが言えないのではないかと感じる。
- ◇ 分からないことがあったら、人に聞けば解決できるのに、それをせずに、自分の頭の中で完結して物事を進めていって失敗している人がいる。
- ◇ 言葉のやり取りで合意がないから、きちんとした自分の言葉が伝えられなくて誤解を招いていることがある。
- ◇ 非対面コミュニケーションがどうなっていくのかという問題や、非対面コミュニケーションが広がっていくことが危惧される中で、人間関係作りなどで対面コミュニケーションが必要となるということなどを提案できたらいいのではないか。
- ◇ 意識の量的調査はこれまでも文化庁でやってきているが、意識と実態の乖離^{かい}という問題があり、コミュニケーションの実態を把握する必要もある。例えば、コミュニケーションを苦手としている方が、どんな意識を普段持っているのかについて、個別インタビューなどで匿名性を確保しながら行っていく必要もある。
- ◇ 文化庁のウェブサイトで、コミュニケーション能力開発ツールやコミュニケーションの考え方などを整理して示すということも必要である。

《石黒委員御発表の要点》

- ★ 最後にまとめる指針は、こうあらねばならないという正解を整理していくのではなく、こんな方法もあるという、いろいろなコミュニケーションのスタイルの方向を紹介する選択肢提示論が望ましい。
- ★ 自分と相手との関係や様々な社会的な条件、場面などによって決まってくる、いろいろな方法を示し、それぞれの良い面（効果）と悪い面（弊害）を併せて示すことで、最適解をそれぞれで考えてもらうためのものとしていく必要がある。
- ★ 日本語による意思の疎通では、言葉によって伝え合うので、言葉の中身としての情報とそれに伴う気持ち、感情がやり取りされ、それらに対する聞き手の評価から逃れられない。
- ★ コミュニケーションの場面における交渉術では、ある種の円滑さとある種のバランス感覚（相手を立てつつ自分の言うべきことも言う）が求められる。
- ★ 情報の伝達においては、分かりやすさが大切である。その分かりやすさには、正確さを求め、曖昧さを排するという面とスピード感を持って迅速に処理でき

るという面とがある。

- ★ 感情の伝達においては、心地よさ（失礼な物言いにならず、かつ、よそよそしくない、親しみが感じられる）が求められる。
- ★ 今回は、情報の伝達面よりも感情の伝達面に光を当てて、感情の伝達を重視した話し言葉に焦点化するのが分かりやすい。
- ★ 広い意味でのコミュニケーションというのは、聞く・話す・読む・書くという4技能の全てにわたるものであるが、実際の文脈の中で言われるコミュニケーションは、話すというところに集中し、書き言葉によるコミュニケーションより話し言葉によるコミュニケーション、受信する側よりも発信する側と一般的に捉えられている。
- ★ コミュニケーションを、話すこと、対面の対話を中心に考えていく場合、社会言語学の観点（地域、場面、主体、関係、機能、媒体、話題に分割して捉える）、話し手と聞き手の心理的な距離の観点（心理的な距離を縮めるという方法で親しさを表現しようとする方向性と心理的な距離を遠ざけるという方法で丁寧さを表現しようとする方向性のせめぎ合い）、コミュニケーションに関わる社会的な制約に関する観点（役割に応じた社会的に求められる適切な物言い）、話すときの目的や機能といった観点（感謝、謝罪、指示、依頼、受諾、断り、提案、相談など）の四つが重要であり、これらを中心に整理していくのがよい。
- ★ 狭い意味でのコミュニケーションとは、他者と社会と折り合う自己を見せ、目的を達成することと考えられる。
- ★ コミュニケーションは1回限りでないので、伝えることだけが大切なのではなく、伝えたことによる、自分と他者との関係性がより重要であり、関係性をより良いものにしていきながら、目的を達成できていく必要がある。
- ★ 円滑なコミュニケーションにおいては、上意下達的なコミュニケーションではなく、お互いが言いたいことをきちんと自由に交わせ、自分の意見と他者の意見をすり合わせていけることが重要である。
- ★ 社会的に権力を持っている年代の者が、コミュニケーションとはこうあるべきだという議論を組み立てて、若い人たちはこれに従いなさいというようなことをするのは非常に良くなく、同調圧力につながり、ハラスメントの温床となるおそれがある。
- ★ 多様性を重視したコミュニケーションの姿を求めていく必要があり、言葉の暴力につながるようなことには注意喚起する必要がある。
- ★ コミュニケーションには正解はなく、いろいろな条件の下、組合せながら最適解を求めていくものである。
- ★ 「現代社会における敬意表現」や「敬語の指針」と、コミュニケーションの

観点から差別化を図る必要がある。

- ★ 置かれた立場によって、求められるコミュニケーション能力は異なる。

《塩田委員御発表の要点》

- ★ 日本語では謝罪から会話に入っていくのが一つのお作法になっていると言われるが、こうした作法が日本語、日本の社会ではどうなっているのかをきちんとつかんでいくことが大切である。
- ★ ある言語表現については、どれが正しい／正しくないではなく、相場だと考えている。現在の相場がどこにあるか把握しておく必要がある。そのための調査が求められる。
- ★ 何かを押し付けるものではないが、大人として現在の相場がどの辺りにあるかを若者に選択肢として提示する必要がある。
- ★ 統語的な面では問題のない表現であっても、運用上の面では、こういう場面と言うのはよくない表現というものがある。
- ★ 「させていただく」の問題のうち、「行かさせていただきます」（「さ」入れ言葉）は、本来「さ」が必要ないところに「さ」が入っているので統語上の問題であるが、「閉めさせていただきます」は、統語上は問題なく、運用上の問題で、感じがいい／悪いという問題である。
- ★ ある表現を好む／好まないは、個人差だけでなく、年代差や地域差を反映している場合も考えられる。

- ★ 敬語は、本心として相手を敬うための言葉ではなく、社会的にこの場ではこういう言葉を使って、相手を敬っている振りをするのがお作法であるということで使われるもので、使い慣れていないと、手加減できず、過剰適応してしまいがちである。
- ★ ある程度、適度感（相場感）を提示するのはとても大切であるが、コミュニケーションとして、そこはおかしいと言う部分もある程度出していく必要がある。
- ★ 場面ごとのシチュエーションで必要とされるコミュニケーションと、その相手と心を交わすために使う言葉というのは違ってくる。
- ★ コミュニケーションの問題を考えていくとき、状況の問題は非常に大きいですが、迷惑・我慢という枠組みだけでなく、利害関係など話し手と聞き手との関係という枠組みも大切である。
- ★ 総論で行くのか、ある程度場面や世代などの各論に落とし込むのかということは非常に重要になってくる。
- ★ 総論としては、人の気持ちと通じ合うため、情報を伝えるために、どういったアクセルがあり、どういったブレーキを踏み込むのがコミュニケーションにとって最適なのかという定義付けが必要になってくる。

- ★ 世代や場面によってどのように実例を挙げて役に立つものにしていくのかは大切であるが、こちらを強調しすぎるとハウツー本ようになってしまうので、総論と実例とのバランスを見極めないといけない。
- ★ 情報機器の発達がある中、「国語に関する世論調査」で、非対面のコミュニケーションにおいて、どのような影響が出ているのかを調査すべきである。
- ★ 「言葉憲章」のようなものを国語分科会として発表することができるならよい。
- ★ コミュニケーションは文化である。経済界，国際社会，コミュニティーなど，その社会の中で何が適切なコミュニケーションであるのか決まってくる。経済界や組織でのコミュニケーション，地域コミュニティーでのコミュニケーション，国際社会でのコミュニケーションといった三つに分けて，それぞれの中での言葉遣いや人間関係の作り方の最適解を示すという方法があろう。
- ★ コミュニケーションの場合，情報の伝達などよりも，他人と自分で考えを共創していくという面を重視し，そこで情感が共有されるという基盤を重視したいと考えているが，言葉遣いという議論になると，その点がなかなか記述できないジレンマがある。
- ★ 円滑なコミュニケーションとは自由に意見を交わすことであって，上意下達をスムーズにすることではないという考えに賛成であるが，経団連の思惑としては，むしろ上意下達の方が念頭にあるかもしれない。その辺り，経団連に対して，コミュニケーション能力が何を意味しているのか聞き取り調査を行う必要がある。
- ★ 仕事を外部化しようとしたときに，様々な条件を書く能力の差がはっきりと出る。
- ★ 上司の側のコミュニケーションに問題があるという声を聞くことが少なくなく，こちらの方が重要な問題である。
- ★ 求められているコミュニケーション能力は何かということ，アンケートでなく，インタビューによって質的に掘り起こしていくことが重要である。
- ★ ある程度具体的な事例を丁寧に掘り起こして議論する必要はあるが，事例紹介だけではハウツー本ようになってしまうので，骨太の背景を示し，具体的な部分と抽象的な理論との間での往還をしていく中で鍛えられるようにすべきである。
- ★ 文化庁は「平明で，的確で，美しく，豊かである」言葉の定着を呼び掛けてきていて，東日本大震災の後，分かりやすさということの大切さも話題となった。「平明で，的確で，美しく，豊かである」は今も変わっていないであろうが，この表現では抽象度が高すぎるので，このように言っているだけでは足りない。
- ★ コミュニケーションの在り方というとき，この日本語を今後とも使っていくんだ，人が潰されるような言葉の使い方はないだろうという姿勢を示していくのがよい。
- ★ 敬語が使えないということは，弱者の武器を持っていないということであり，就活にも影響する。
- ★ コミュニケーションの問題は，どこをターゲットにするか絞らないと，拡散して

しまう。

- ★ コミュニケーションに関しては、余り固定的なものを出そうとせず、調査結果などに基づいて常に見直し、改定していく前提で作った方がよい。
- ★ コミュニケーションということでは、敬語に限るものではなく、この場面では敬語を使わず、もう少しぎっくばらんな言い方をした方がいい方向に行くといったことまで広げていく必要がある。どう収斂^{れん}させるのかということもあるが、そのように広げると、「敬語の指針」とは違った見方でのアウトプットが可能となる。
- ★ 対面での敬意をまとめても弱いので、非対面コミュニケーションの持っている問題点なども含めたものとして、敬語以外の一般語も対象に、現段階ではこうだというものを作る方がよい。
- ★ 最初に大きな方針としてメッセージを示し、その後、具体的指針というのが効果的である。大きな方針としては、これまで、美しい日本語、分かりやすさということが出ていたようであるが、これからは共に生きていく社会を作っていくコミュニケーション能力ということであろう。そうしたコミュニケーション能力を、国際社会、組織や企業、地域コミュニティーといった層に分けて、それぞれの社会が求める文化的制約を考えて、最適解を示すというイメージを持っている。
- ★ 漠然と国際社会と言っても、ビジネスの場であるのか、フレンドリーな場であるのか、どこの地域なのかによって複雑化すると思われるので、そこまで扱っていいのか疑問である。
- ★ 日本語を学習している方について言えば、日本語社会ではこういう言い方が好まれるという選択肢を示し、そこから先は個々人で考えてくださいという方向がよい。これは日本人における日本語の相場を示すということになる。
- ★ 国際社会において異文化の人を相手にする場合、「聞く」から始まらなければいけない。
- ★ コミュニケーションと言うと非常に抽象的で多様性があるので、何か問題があるという意識を持っていなければ、指針をまとめても見ようとはしない。
- ★ 調査によってどういう問題・課題があるのかをあぶり出さないとけない。その問題・課題に一つの解決策を示したという形を作る必要がある。
- ★ 日本語のコミュニケーションの特徴と観点は入れていくべき。
- ★ 若い人は、英語の方がコミュニケーションを取るために優れている言語であって、日本語は第二言語であると考えられるようになるのではないか。そうならないようにメッセージを送る必要がある。
- ★ コミュニケーション能力ということが出てきて、学校現場では、よい話し手と聞き手を育てるということを扱ってきているにもかかわらず、子供たちにはそのことがストーンと落ち込んでいないという現実がある。

- ★ コミュニケーションという言葉に対する万能感をいろいろな人が持ちすぎている。対人関係が完璧にできている人はいない中、その原因をコミュニケーション能力の低さに求めている、コミュニケーション能力があれば、何でもできるようになるという誤解がある。それだけに、安易に「コミュニケーション」という言葉を使わない方がよいのではないか。
- ★ 社会人基礎力においては、コミュニケーション力という言葉を使わずに12の要素に分けたことで、自分自身の足りない能力を見いだすことができた。
- ★ アメリカの教育では、「聞く」を重視した言語活動が行われているが、日本においては、「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」の四つの活動に分けられる。その四つを更に細分化してはどうかと思う。

《福田委員御発表の要点》

- ☆ コミュニケーション能力とは、全ての生活における基礎能力で、他者と全ての時間軸における共有した世界を構築するための道具、つまり話し言葉や書き言葉、非言語的行動を使いこなす力と定義付けたいと思う。
- ☆ 国語課題小委員会においては、コミュニケーションの定義とコミュニケーションをより良く実現するための方策とを検討するよう提案する。
- ☆ コミュニケーションをより良く実現するための方策は、単に、いい／悪いを示すのではなく、コミュニケーション能力をどうやって上げるのか、コミュニケーションの場をどう気持ち良いものにするのかといったことを考えてもらうための指針として提示する必要がある。
- ☆ コミュニケーションをより良く実現するための方策には、他者意識を持ち、同じものを共有するのが目的であるということの意識化が重要である。
- ☆ 受信者側にとって分かりやすいコミュニケーションには、発信者側が、話題に関する知識、受信者に関する知識、言葉に関する能力（語彙力、構文解析力）、既有知識を持っていること、また、自伝的記憶の構造を利用し、記憶の確認を行うことが求められる。
- ☆ 受信者に関する知識には、相手の年齢やそれに伴うワーキングメモリー容量、処理能力が含まれ、それらが分かっていることで、相手に合わせた語彙や表現を選択できる。
- ☆ 受信側は、話題に関する知識、発信者に関する知識、推論力、メタ認知能力が求められる。
- ☆ 他者を意識することで、自分の言語能力や非言語能力の使用能力を上げる必要が生じる。また、自分のコミュニケーション能力が上がることによって、他者を意識した情報や感情の伝達ができ、他者の状態がよく分かるようになる。そのようにして、より良いコミュニケーションが実現できるのではないか。

☆ 相手の状態に合わせて、どのように言い換えをしたり表現を変えたりできるかなどのパターンを挙げて、考えてもらうものがよい。そのためには、様々な場面を網羅するのではなく、状況に応じて使用頻度の高い語彙や表現を調査して、言い換え可能な語彙や表現の例を挙げていくといった方法があるのではないかな。

☆ いじめで使われる言葉は、そもそもそうした言葉を使うこと自体がコミュニケーション能力が低いということになると思うが、共有した世界を構築するという意味では、相手への効果的なダメージを与えているのでコミュニケーション能力が高いということになってしまう。コミュニケーション能力の定義には、「より良い関係を築くことを目的として」や「他者に配慮して」などの文言を加えた方がよいのではないかな。

☆ 定義に価値を入れることは、学問的には好ましくないと考えられるが、小委員会で出す指針ということであれば入れることも考えられる。

☆ コミュニケーション能力には、例えばそういうことを思っても言わず、相手と自分の世界を共有させないということも含まれるのではないかな。

☆ コミュニケーション能力について、日本の置かれている状況なども踏まえて、どう考えるべきかのアンケート調査を行った上でないと、納得の得られるものは得難いのではないかな。

☆ 読み手を意識して推敲する能力や、聞き手の理解を想像しながら話していくことは、分かりやすく伝える上では重要なことであるが、読み手や聞き手といった他者を意識することのトレーニングは可能であるのか。

《田中委員御発表の要点》

☆ ソーシャルな場面におけるコミュニケーションを扱うべきだと考えるが、ソーシャルな場におけるパーソナルな表現を用いたコミュニケーションも存在する。それをどう取り入れていくのか悩むところである。

☆ 共通語と方言の使い分けについては、地域差、年齢差をはじめ、性別、学歴、職業といった属性による違いも大きく、コミュニケーションを行う上でのポイントとなっていく。

☆ 「打ち言葉」においては、パラ言語や非言語行動といった感情のやり取りに関わるものが落ちるので、パーソナルなコミュニケーションや親密なコミュニケーションを取りたいときに、落ちたものを補填して気持ちを表すために絵文字や記号、方言が用いられている。

- ☆ 方言には、現実の土地と結び付いた、生活の言葉としての「リアル方言」と、リアルな生活の言葉ではなく、編集・加工された「バーチャル方言」とがある。さらに、地域性を喚起するという点から、発信者の地域性を喚起する用法（話者のローカリティー提示）、発信者と無関係に、話題の地域性を喚起する用法（話題のローカリティー提示）、発信者も話題も無関係に、方言ステレオタイプに基づいたキャラを喚起する用法（方言ステレオタイプと結び付いた臨時的キャラの発動）とがある。
- ☆ 災害が起こったとき、方言が、その地域性喚起の働きにより、家族や地元の
ちゅう
紐帯として使われた。
- ☆ 方言は、土地と結び付いた伝統文化への愛着や継承・発展との関係だけで見るべきではなく、多様な表現リソースとして位置付ける必要がある。
- ☆ 多様な方言コミュニケーションについては、その実態と言語意識の調査分析などを行うことができるであろうが、かくあるべきといった姿を模索したり提示したりする方向性には、なじまないと思われる。

- ☆ 方言のことは指針の中に入れてもよいのではないか。コミュニケーションが相手とのより良い関係を考えていくのであれば、シンパシーは外せない問題である。方言は世界を共有するために同じ背景を持っていることに通じ、シンパシーにおいて有効な手段となり得る。
- ☆ 「受信者に関する知識」の中にはどういう地域の出身かも含まれるものであろう。
- ☆ 放送の中に方言をどのように取り入れていくのか、どのようにすべきなのかという議論はあってもよいと思う。
- ☆ 顔が見えるコミュニケーションにおいては、この人だったら許せるということが生じるので、そうした個性や顔といった画一化されない部分についても取り入れられたよいのではないか。
- ☆ コミュニケーションにおいては、その人がどういう人か同定されるということがあり、これが広義の意味では顔が見えるコミュニケーションと言えるのではないか。
- ☆ 一方、コミュニケーションには、顔を見せず、ネット人格と言われるようにフェイクしてのやり取りもある。こうしたコミュニケーションはコントロールのしようがなく、対象外とするしかないところがある。
- ☆ 世界観が違う者同士でも意思疎通ができるコミュニケーションというものも重要なのではないか。
- ☆ コミュニケーション能力というのは、情報や感情を共有することに加え、共に創るといった面もあるのではないか。

- ☆ 「共有した世界」という表現の「世界」という言葉は、閉じた体系としての完成した統一体という意味合いに捉えてしまうので、「部分」などで表現した方がよいのではないか。
- ☆ コミュニケーションには、対面型と非対面型とがある。文芸作品を書くときには、非対面型のコミュニケーションとして、他者（読み手）や客体化した自己との対話をしていることになる。そういったコミュニケーションをどのように捉えるかという問題がある。また、対面型のコミュニケーションにおいては、相手の立場や生活の状態にまで配慮しながらでないを通じ合えない場合もある。
- ☆ コミュニケーションの在り方を考える際、場面別の社会的なテンプレートを作ることを期待されているのではないか。大きく当たり障りのない社会的なテンプレートを作り、それをカスタマイズ、パーソナライズしていくための力が別に必要となるということによっていくことになるか。

VII 「その他」をめぐって

- 従来型の調査が本当に実態を反映できているのかを検証することは難しいと思うが、一旦立ち止まって考える必要はあるのではないか。特にコミュニケーションやウェブ関連は、アンケートが回ってきても本音を書かずに、面倒臭いから、適当に書いておこうというものもあれば、あえていいかげんなことを書くものもある。今までの調査方法が適切かどうか一度疑いの目で見ることが必要である。
- 調査方法に関して、知っているかどうかでなく、少しまた別の角度から、「意味も分かりますか」といったようなことも尋ねられれば、より立体的に実態が分かるかもしれない。
- 例えば「鬼のように混んでいる」とか、「やばうまい」とか、言葉のポップさが、今の時代はすさまじい。「すさまじい」というのは、嫌な意味でもすさまじいし、刺激を受けるという意味でも非常にすさまじい。それだけに、そのような変化を何か残したい、拾っておきたいという気持ちがある。
- ★ 情報機器の発達がある中、「国語に関する世論調査」で、非対面のコミュニケーションにおいて、どのような影響が出ているのかを調査すべきである。